
六畳半へ

六畳半

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

六畳半へ

【Nコード】

N9821M

【作者名】

六畳半

【あらすじ】

最後はハッピーな終わり方。自分の作品の中では珍しい。

世界が走る。コロコロ転がってどこまでも地球が回る。人間が駆ける。地を回る。空を駆ける。人が飛ぶ。遥かなる上空へと。飛び回り果てる。何時の間にか。そう言っているうちに砂が口の中に入り込む。むせて、何にもいえなくなる。だけどむせ終わると早口言葉のごとく繰り返す。同じ言葉を何度も、祈りのようにあるいは呪いのように繰り返している。

誰かに呼ばれたので振り返ると女の人。誰だ？

呼んでいるので駆ける。地を駆けると、足跡が砂にこびりついて残る。足跡。すぐに消える。

「やっほ」

「やっほ」

踊り回るのがその人と。楽しく回ろうほととぎす。それでいいよねってアイコンタクト。

「やほお」

「やほお」

何時までもぐるぐる。飽きたらそれは止めてぐるぐるしない。

砂を走る。たまに足を砂に取られるけど、日差がめっちゃ暑かったりするけど、どこまでも走っていく。すると女の人先にはてちやって、「もうむりもうむり」とか言うので、「いけるって」とか言ってやると怒られる。

「おらあ」

脅しかけてくるのでびびる。

「ううん」

と抵抗するがままならない。水を腰から取り出し、わけてあげる。もう残り少ないのにさ。

「さんきゅうさんきゅう」そう言ってやがて立ち上がる。腰に水も

持っていないくせに元気が良い。

おかしくね？

砂をかけまくっていると、やがて海に出た。真っ白な海。こういうの死海っていうのかな、とか聞く。しらねって答えが返ってくる。つくづく役に立とうと思わない人だ、と舌打ちをしてやる。相手は気にもしない。猛者だ。

じゃぶじゃぶ中に踏み入っていく。すると体が途中で浮かび上がる。

「うおお、うおお」

叫ぶ。彼女も驚いている。

「うおお、うおお」

よっし、って思ってお互い手をつなぎここで踊って見る。

「やっほ」

「やっほ」

うん、それなり楽しい。とか思いながら、まだまだ、どんどん、死海を突き進んでいく。

深さはそんなに無い。どちらかというとき浅い。とにかく白い。中が見えないくらい白い。そんな風に見えない水の中に不安を感じ始めていると、その不安が的中する。

舐められた。なにかに。

「ひっ」

とつないでいた手を迂闊にも離してしまった。それがいけなかった。

急に流れが生じた、死海に。川のように、一方通行に。彼女と離れていく。どんどん。彼女が遠ざかっていく。

「どこまで行っちゃうんだ」

助けを求める。向こうも求めている。

お互いがお互いにヘルプミー。それって絶望的じゃん。

「あああ」

流される。激しくなる白い海。口に入り込んできた。むせる。

意識なくなる。さようなら。

起きたら薄暗くて気味の悪い森。紫色の毒々しい感じの木だとか葉だとか。土が湿ってる。

よくよく見たら：

「う」

嫌いな虫。ムカデとか。そういうやつが何匹か見受けられる。下手に動くとまずいな：警戒。その瞬間に手にムズムズが。

「うわああ」

叫んで飛び上がってどこまでも駆け抜ける。全身に鳥肌。

駆け抜ける途中で湿った土に何度も足を取られそうになる。わっつの足とあんたら大地で対決じゃあ。危ない、ぎりぎり、危ない、大丈夫、危ない、うわあああああ！っ

つってずっと駆け抜ける内に森を抜けることに成功する寸前、差し込まれる太陽の光。

「出たっ」

言いながらジャンプ。太陽の光に向けて。

だが、なんということだろう。それはフェイントで、なんか知らないけど読者モデルがパン？だっけそんなやつをたかれている現場に到着。なんかの雑誌の写真の撮影？っぽい空気が。明らかに場違いっていうか森の隣で撮影すんなよって思う。森ガールか、これが噂の？

「ちがうちがう」

否定された。読者モデルに。って、よくみたら彼女だった。あの女の子。ポーズとか決め手気取ってんの、ちくしょう。ふざけんなよお前。俺はムカデとかに怯える数行間の苦痛を味わったのにお前は読者モデルルートを行ったのかよ。俺はムカデルートだよ。どいうことだよこの選択肢。俺が男だから？ 君が女だから？ 違

うか、そういうことじゃないんだよなあボケナス。

「ちがうちがう」

わかってるつつーのに。なんでそういうこと言うのかなあ。

二度否定させるな。一度自分の中で否定してんだよこっちは。二度否定させんな。

「大事なことなので二回いいました」

大☆爆☆笑された。何回も手の平たたいて、歯むき出しで。歯がやけに白い。てめえ。

そういうわけで、歯医者に出向いた。俺も白くなりたいから。

汗を体中に掻いている感覚を体験するのにも飽きるほど、私は人生に飽きていた。飽きていたというよりは、何か希望が失われているというか、真っ白い光輝くものというのだろうか、それが若々しい青春の象徴だというならば、それが今私から失われていることは、きっと私が年を取ってしまった証なのだろう。悲しいことだが、事実は事実として受け止めなければ。

そんな私は、今日は歯医者に出向いている。車から流れる一曲は「LET IT BE」。スペルあってるかな。まあいいや。これしかCD持っていないからこれをかけることしか出来ない。チャンチャラと流れるリズムに乗りながら爆走。次々になぎ倒されていく他の車たち。

「アイムソーリーヒゲソーリー（笑）」

最悪である。こんな人間になるつもりはなかったのに。もっと周りを幸せにする人に…言い訳タイム終了！ 私は今日、歯医者に行かなければ。

歯医者につくと老人がたまっていた。コンビニじゃなくて病院が老人クオリティか。とか言いながら私も実はコンビニによくたまり

こむ悪党だった。だから老人のことも悪くいえないよね。とか言いながら舌打ち。もうわけがわからない。自分で自分がコントロールできていない。じゃあ歯医者じゃなくて精神科いけよ。ってな話なんですけど、そういうわけにはいかない理由というものが幾つかあります。

まず一つ。話の流れ。

まず一つ。差別される。

まず一つ。歯が痛い。

結局、その程度の理由である。悲しい。

そんなことを言いつつ舌打ちをしたら同時に老人が屁をこいた。

わついの舌打ちにあわせてシンクロニティ。はっ？

チツ、ブツ、チっ、ブツ、チチっ、ブブっ、チッチ、ブブ、チチ、ブブブ、チーチチ、ブブブ、チッチ、ブブブ、チーチチブブブ。

「武本さーん」

その老人は名前を呼ばれた。

『ブツ』

と屁で返事をしてから彼は立ち上がり、診療室への扉を開けてやがて消えて行く。屁の臭さを撒き散らしながら光に吸い込まれて消えて行く。

こうして、約一時間私は歯医者で待たされました（笑）

「ふーん。そんなことあったんだ」

看護婦は相変わらずの彼女だった。彼女が私の歯を建築し直してくれる。

天井に蜘蛛の巣が張られているのを見て、何かひっかかりをどこかで感じる。奥深いところなのか浅い浅瀬なのかわからない。天井に見られているのかもしれない。私が見ているのではなく、天井が私を見ている。何の意味も無い思考を、昔から何度も繰り返してき

た。今も、感情が波打つ防波堤に打ち砕いては消えて行く。

「ふーん」

真剣に話したのに軽く流される。そうこうしている内に建築は終了した。

鏡を見せてもらう。不良物件だった。

「クレームつけるぞ」

「クレーマーはお断りしています」

「はっ」

「うん」

「やっほ」

「やっほ」

踊っているうちにボロボロと崩れ落ちていく牙城。

最終的に入れ歯にでもらって、ポリデントも貰った。

そしてわついの歯医者デビューは終了したのである。

目を覚ますと簡潔な六畳半の部屋にいた。

彼女は何時の間にか眠っている。いびきをかいたりしている。

風鈴が音を鳴らしてくる。その音がやけに気にかかって安眠が訪れない。

だから目を開いたり閉じたりということを、ずっと。明日、用事があるのに。大切な。

しっかり眠らなくては。

睡眠に対して義務感が生じると余計に安眠は妨げられる。もがけばもがくほど眠りからは遠ざかっていく。なんだか哲学的でいいよね。

そうやって思ってから苦笑してみて、むっくりと起き上がった。熱気がむんむんと六畳半で濁っている。空気がだめだ。仕方がないから、エアコン。ピッ、という起動音がやけに大きい。

「ぐあ」

しかしいびきには適わない。風鈴もエアコンの起動音も全部、掻き消してくれる彼女。

何だか貴重な人じゃないか。以前は邪魔者だと決め付けていたけれど、それは勘違いを生み出す早とちりだったようだ。まだまだ、未熟者だな。

じきに空気の淀みが改められて清浄されて澄み渡っていく。これだよ、これこれ。と言った快感が頭の血の巡りを安らかなるものへと変えてくれる。人間には空気が大切なのだ。これを意識することをおぼえたものから苦痛を体験していくことに変わる。血の巡りが大切なものだから、その根源である空気も大切にされなければならないのだ。呼吸さえも整ってきたような気がする。

すー、はー、すー、はー。

いびきがうるさいけれど、今日はよく眠れそうだ。

六畳半。以外とこの部屋は、悪くない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9821m/>

六畳半へ

2011年11月13日18時56分発行